臍隱居

千嶋先生

全

口 g
1515

遠9
1315

伏の基もぐさ秋を早中なをび指く
もいやうふ靜なる軒ちのふすたく虫の聲く
あそれ友も哉と思ふ夕ぐれ日頃ノ同志ほどひ集
を折く座敷園ふあ一ツ一箇の小天地とや元来天
ヤさんとそれ人ハ一
人混然そう無我無智にしておのぞう頭ふ
矣うあて天に配しい方ふて地に舎ふ脚ハ無用
と覚ゆるぞを北辰小仰ぐうといえんうこい出

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

をお経の道途とうとくまた一人其ころふみもくれ我社をれかうて思ひ出されし日ふーきの美絨毛通ふーふ裏へさーと入るや庵のうち闇くうんしんとして座せう立ようりいの女人ぞと向へば我いまも瞬着と云もの也と答ふ拙くおうな名紙つきひたりその甚いまれを示しまへ向ひくまが居我洲うち諸ろうんとうて回我いぞふーてまれさやうもんざやう

今に知恵といふ紙紛ぢもそまゆくをうを是まで無事にくらせう洲い若紫なれば今我がの而紙能く吸着いで新い主親のごとしーあるいい兄第れでーふや家来い妻のごとしーあるい兄親まれ朋友諸人の全能の如ーふ具い推して勉るとし安楽なくべし不和行ふれい恵方かーをふ和合ゆくいもぐくも

又何事なるはーとこれを着り足に我るくぐいくぐ
行歩の事成達せんやと氣まゝをいやうの仰が
あるても我かくばめーも有るを油ー食れまー
高賣諸職もでき又ぐと臂を張くまに我と驕
り他をいやー免同い氣通きまに色よそを氣を
ありるまに香ふめぞー耳の穿口の味身升業曜
ふいるまで皆ありるこひ我意ようやる事ありり
世の中ふの我ふるよ小家といへどを一人すく家我

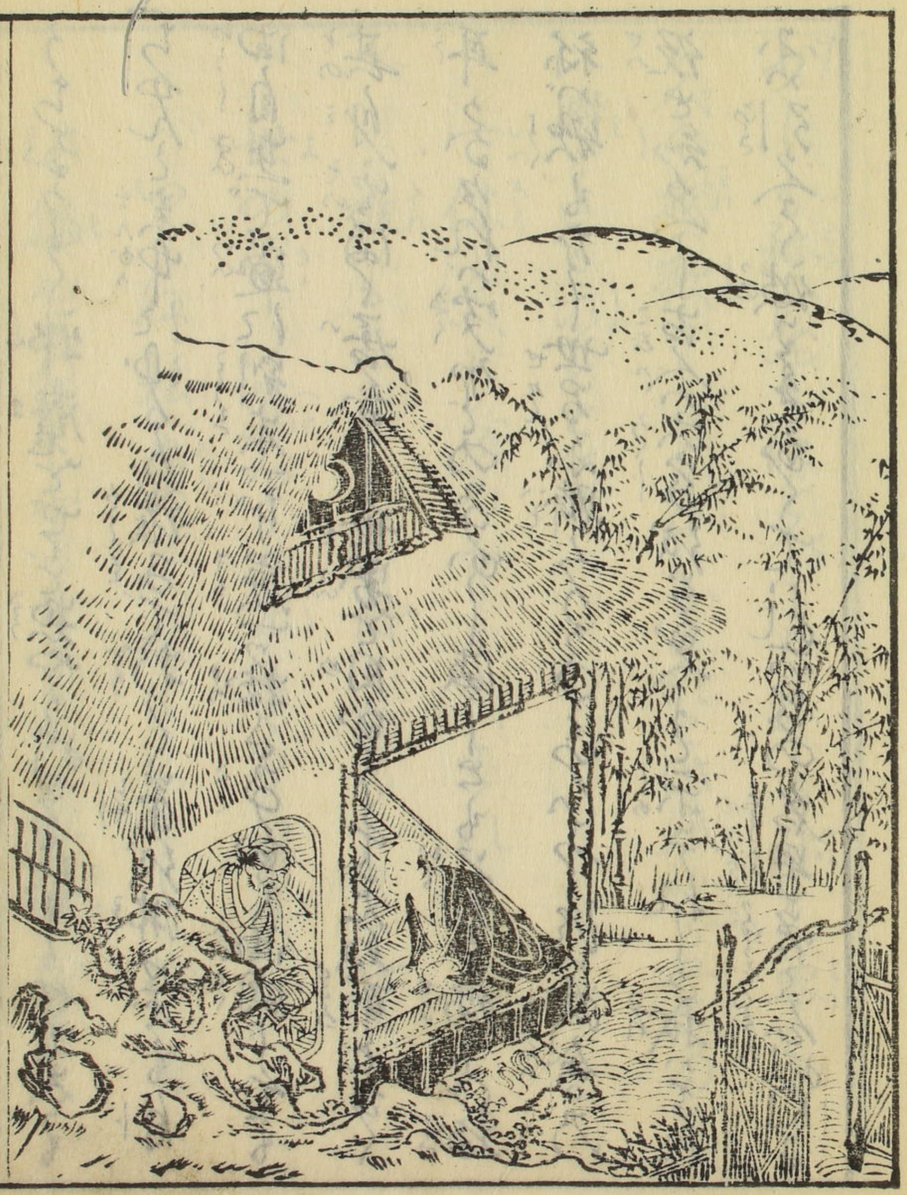
治るのからをはしていそんや大小をも人なも使の
ありの家業ある身い猫更の事也先る人我てそと
自慢をべうぐ妻ありて同我治め真るの為を小
も女親への事人をなしてこれる其新ふく外乃勤
働もふのぐまなく勤るふあぐやふ代を使沢二
使ふもなる色ふ人も我ありるこそ渡世もせるる
る我ありるこそ迷惑るべーと思い必く養ふべぐ下女
小者等い仰付やくにもるぐなぐ滅他もるにや

しむべうびん種那も内儀も家内の人こゝろ下かの
たいて食せくくる沙くこ已が業のまの争ひ極悪
や体ぢめ〳〵もあるべうり小者のやうに小使ふおさ
まり或ハ町役一家のお祓りの〳〵賣買他出上下一人
して走つ廻つい暇く雑義多くべーこれ能こそ
勘まう〳〵五体も汚の頂のうへ足のうへまで塵
毛一本もゆけくいなうぬ世の中ふを塵毛いなく
てもゆまいねやうにてもあれどもそまい大病のふ極まく

人のいやがる第一なうこゝまで世害いたり〳〵
きこのまう役ふたうぬりのいやうもなくこれも
ふけまでゆうねといふりのもなー眼ゆでふけまでゆ
ぬりのいふくれども盲人も一生それでくー耳のきえ
ぬいふ自由ゆるふまでこれ
もそまふ小生涯を送まうまなー足ふも亦復
かくのぶとーかやうにいそぐ計い汗時もゆくてゆうま
ほー〳〵と自慢すべくれどもこまで一生の終ふ人結句

何のかまひなしそまゝ切のまとゝいてよきのみち絶をだ
何が一つそけくも不自由ある世ゝ中なれば五倫五体
和合のこゝろ仕して天ゝ地結ぶ大あるの紙ゝ立て
邪のゝ私業に曲らまぬやうにをゝしへる人も体裁よ
代も老ゝるを若きも男女も女中も親父様も息男
屋も百姓屋も職人屋も賢人中も富饒も貧窮も
知あるを愚あるもたゝ一念おやうく
我あゝていの六字の名號一度仏よ稱へかゝる速か

て代家を退出ゝまゝ息男こゝろ悪敷動毒あり女中へ無を
叱くべ〳〵今始ゝまゝ我悪れつゝゝて主従親子のつゝに及び
のゝべ〳〵加ゝそれより三悪道に墮落ゝてうのしるゝと
ど夫婦兄弟諸親まゝ朋友知音世間ゝとゝうと賢事に
いるまゝて兎角無理せどこゝ程いゝてこゝむごたるみなく慈
悲みく和合せんとたゝ一ゝ我いんりけの垣ゝそ老ゝれ
大安楽の身ゝとゝなべ〳〵我いんりけの垣ゝそ老ゝれ
ゝ様ゝよゝし奥へうこんで頭ようゝ足のゝづまゝで身



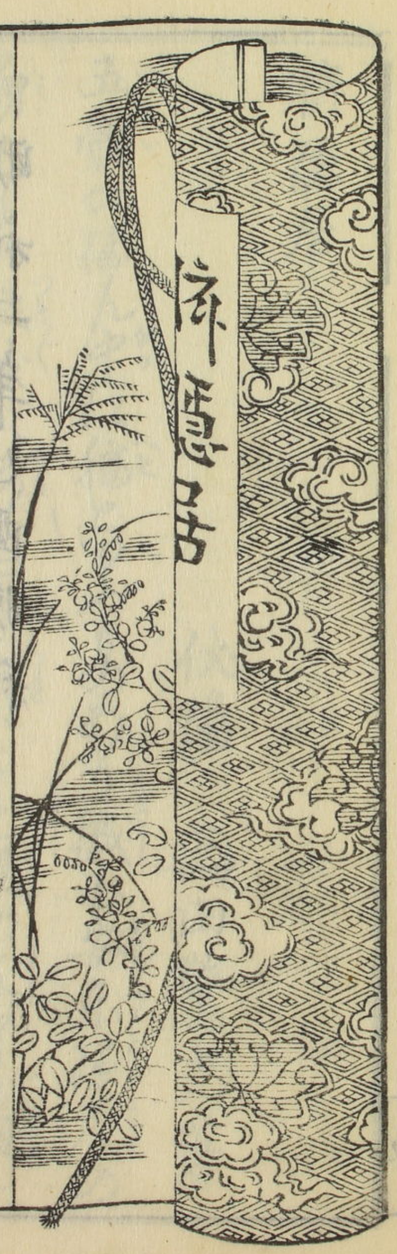
うちのうく邪魔をせどもせやうれせてきも
ちやんと主毋にゆり纏ろ纏ろておく筆紙沸せどもも自
由自在で遥に別末一本岸一の指さるやく西國しても
其身をはく居ながら世界を目のくてうんの所とやく
耳るれが安かとのやうにしほしともそろを称うの指
称が歌もなし世界が脇くまこれしが我がそれ
況と知人へ古人の言紙とるくまこれしが我がそれ
おいうのくく彼うまるくていれ六字の名号をこんな門は

がしも称へぬやうにをべしといふ外必要いるし
をべく我が歌ううるるれとは後海がこまの為
に臍うをこをととて
一休るへそ紙めるしといふれをり
誰もおまこんよ目が物うをこをく
世の中に痛かとて楽をなれの紙
いうぬ私業がいてくむ
ひ痛をるそやうるこうれ私業るま

乃そい毎朝かくなん云を志ろし称い
右のうことを志ろし称い
の廻ることをくるうく逆しく喰どるうち我稲
我もるるゆり武人の結ひし書あり是ろ人少くく
標中よう取出せば五体和合稲熟居と影号あり庭中
にひろげ拳つまくつまき実も荷苔を合をまるがね
しろへど一度も紙抱くろいうる稲日でと称とて
へて笑ひぬ号回いろかいのきも吹の人塾おりよに民家の

ろ男い幼稚ろう数を吹のまれふして五倫和合れ程
にんろし果おうき諭しるまで聞くに画を加へ棒よ脇て
繋児の暴じと常に耳同よるれさ也に我ろ多れ痛
ものいつこと是のうにはうさまつけ激塵なりが肌の端よ立
ても身中きこいろ紀そのなり是即人手つの不和合と
おーもかいろ道理るれがか人の道おりる人恵義親へ
若支婦兄弟称親まへ人を彼よも益懲おりて朋友と変
つ紙信実ろー和合せるびるねと志ろ仁のまともなし

に面白くそひもまものふあらば小児祖学のる
便よせんとひられば一座宣給るべと同じくみよゆ
くるきうがつまを書てよとのせつが望るをふとる
はくふくんとひんぜん書てよとのせつが望るをふとる
て讀そんつゝ紙物へく月音ふひの城やうのく園
及ぶ席の長ひそ此事ふ安永甲午の多八月
朝倉の嬰婦に筆ふとれ



序

生あるもの死のり佛のまび衆生あり上あれば下
ある知者あるもび愚者あり其外ふ差等別
あり中ふ人ぞを皆天命にもとづ時ふ物ふ

忘(わす)れ[illegible]なるがごとし故(ゆえ)に五体(ごたい)和合(わごう)隔隙(へだたり)居(おる)と影(かげ)ぼうし愚(おろか)なる輩(やから)にうつし徒然(つれづれ)乃笑草(のえぐさ)

明和二年乙酉晩秋

伏陽　岡田驚光著

五體(ごたい)の内(うち)中に猛(たけ)きよりのあり誠(まこと)に安楽隠居(あんらくいんきょ)の身(み)なるべし徒然(つれづれ)にそやう我(わが)こゝろ臍(へそ)の玉中(たまのうち)にて世間(せけん)はなき合(あい)のまゝで背中(せなか)よりうへと人(ひと)もいへ我(わが)が住(すむ)国狂結構(くにきょうけっこう)なる所(ところ)あらじ先(まず)夏(なつ)の暑(あつ)さを[illegible]ひやうさうが寒(さむ)さを[illegible]ふもさうあり絆(きずな)のうとそてもなれど暖(あたたか)にくらせばの孫(まご)もありげようやまれ猪股(いのまた)

免許の身ゆく智恵も其分際相應に有つたの思ふ
こころおけきどはあるものゆゑ若のなきといふそのかし雷
て大禁物一生ひ離よあくねこと紙数ど思もう
ぶせふ伏し持中とゆくゆをぐ脱なきい深くあんずる
おくもるしほうく世間紙足治ふをべておのきが分を
忘をよ残うやむこのぞ多うき藏や山不在高有
僭則名水不在深有龍則靈とは古人の言葉ゆゑ
わさまくもるよ下なよ紙うやむもこうふこをと猶

うちうなづきてたのしこころの打苦女御のしをう
をゆおする見のくとといふりの思ひけるい我た右往功徒
なををのいおくでおゆ見みくこそ第里のうもゆくく
多柄とゆど我くたくでいうぞでも功もなうんや其上
第れ不浄へをて我おおろう人我い御けがきする拘徒拘
おとなれふ勤夕湯水徒たふふを我くいおふふ
上にゆこいい拘垂ひくふいをゆよ足ゆもせぞ五体お須
布をはうくでも我くいい漸く宝氣の時も袋一室をゆ

おだろう尤草履雪踏いおてぐべもせ家へ着る時い
ほきもりてこるへ其上畏るれつくだみのそのりても尻
ふ袋つもらるいふ拭くれくーもをに行めがそのくい袖ーを先
らくそこそやひもくこ行うこ念なまびせめく頭を
うづうせ身横を装ぜんりのとた右談合一文ーまび
もびつと家へのがう親ひうるふ孝助晩い振舞ふまも
のまこ家ほくうほくーい時うそきされこ祝うひをねーく
で居こうける実ーにあがりご望々うこ彼生業へ着う

きーふ例のぬく尻よまれ数居くのまれ挨拶かど
るふ地先のりてなーあうた太の具私る夜そとうる
ぼさ合もびつまこいふ外と殺さんとせーごこふ一の
雛傷あり五体を守る猶添居まやそくい着ますー
いうぐいせんと亡魅さうし気とうる亜ーい思ひ立うる
大望かまびがーうらひはゆむごさと頻ふもひごとをそ
殺らをけう打音産業ふい程口吐ーの拍子にのり一日よ
る聲して大笑ひとうくる猶も西国をでせうまうひる

を覗てたゝのきひろい今宵ぞ本望達るべき時ぞと
ためよろけまどに頭ふ肘痛の蚤出るに次第ふくるまり
けまどに掻い下ろ我に離をるを着わりを覚へくろいで
く曇と思せぐんとちろおろとろて額ふあるくな紙も許
雲と叢雲ふのくめきろひろい頂よるをふ責む
べーと大音上てのくしまどに附いひるまぐ下知をるし
森のまおろて紙帳りくまろろに駈り方便の
投紙ふくさんぐにりと立姫しろ三里のあとまで蓬

の矢と艾とし矢をそろてきろくに書ろまい今ろ
志びつもも当はりのくよ忽ちろる魅まども大望を全
此俤ろ退く事のの悩さおを窺けろんをろさん
その紙と見そろしも無念の体あく
当まろけを縛いけるの紙きくや否急ふ
ぞそく取つまろ既よ上下の

さつざいつお治ることはいふ
やまざるう風雲あまねく宝て頭ひ事をはらうへ
きうぎまの撃撲やむことなし有まじ我が源君といひ
るがう五体のメ指紙守る身なまで此事だうい其
侵小捨亜がうしいでくやちづめんどせんまでよう死れ
決わをなるまと表ふ小悪細のことまも取とるでいそ

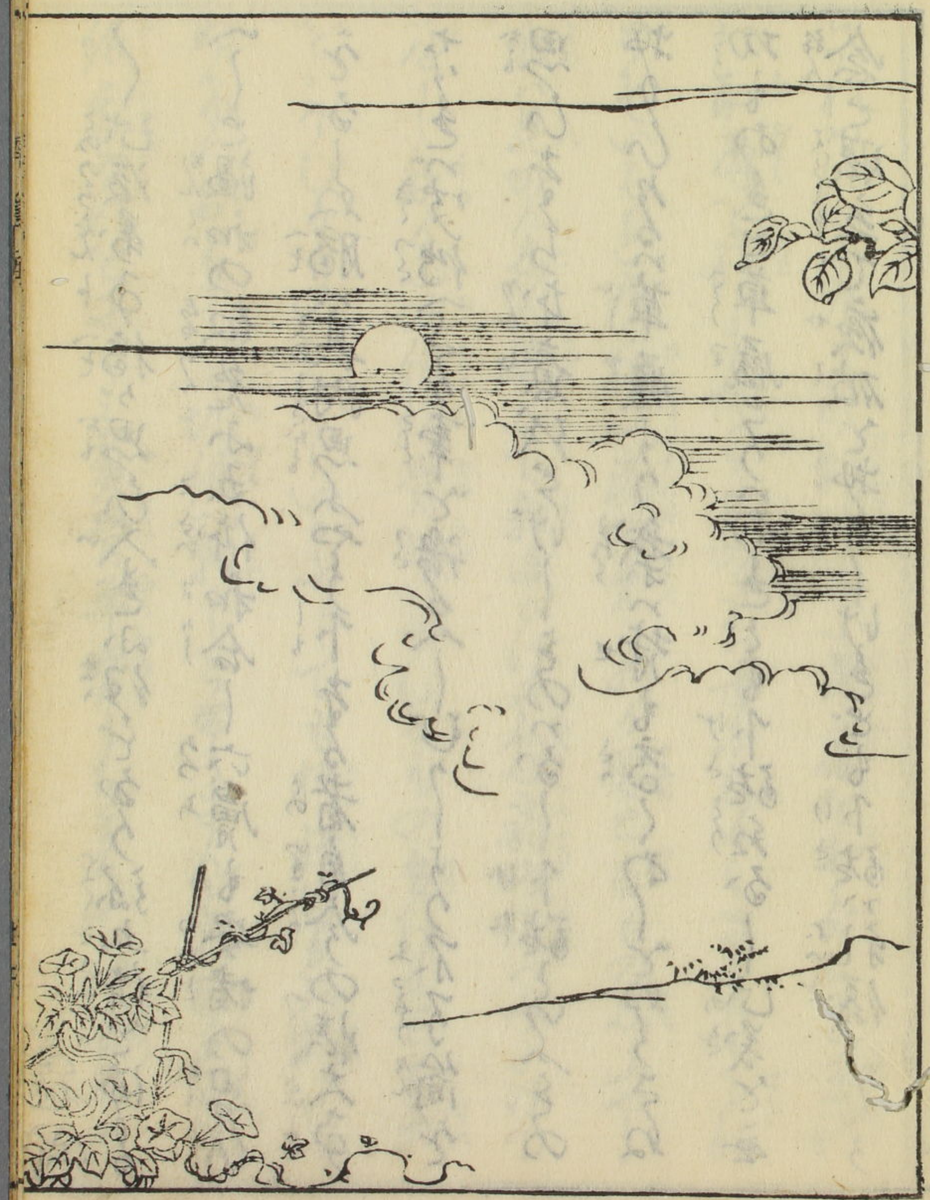
十五

せ々る頑ハ熟思ひ見めうよ下ハ則天地ゆり天をト
きは地を恵を大地ハ上なる天ふきるごひおーも背く
物でるーひ乃理にあらぶじと正しく守るりのなるハ陰
陽五行順みて仁義五常そのよつを忽ち身治うて
五体の國家静溢るくん珠よ人我い生死ハ根本邪
心るけまご生死紙離るる生死を離て佛衆生通ずる
身るごいさくる上下ハ隅おくーとのく正直忠信紙
当一とせご神ゆめ油頼よやどう佛菩薩も擁護

あらん斯いひ人どもに下さる者いやしきゆゑにひがこ
あまさび向後下の心をあらざらむるなみく彼がかたちを
仰らを見給ひ袋屋仕立把屋るよの店前或いのさにつく
しるお性来の人ゝ比ようちづくよおもなりぬべし
又旧功をるしうる老母下さるりの思ひて
へやたしけ二ケ條許容わもうけとして杖をおさ
恩愛うとけまさ乱をやをし読小言おくく染大き
下ようう記る其害いよのうれさまがよてる方なとおい

十六

きこと給ふべしとあまねいむつくう和らふ面白ゆりしく
述へられお願い合點くと膝とのぞきてうかは事が痛い
あろこう激笑てし度の大さうそ愛ま我多が出爰を
ゆへ頸へ射しし痛う釈るきふ調法答もるて其うへて
我が私ひと立て給ひ已ひ人芭悪の恩ぐへふ翁い霧香
の痛を黄蜆が痛くう狠までもすろう出して大佛
殿の南溝ひ痛ひ平金寺へ寄進せば来代人ゝ比痛
のなんとのがるべしとやをば頸い喜悦浅のびば善哉

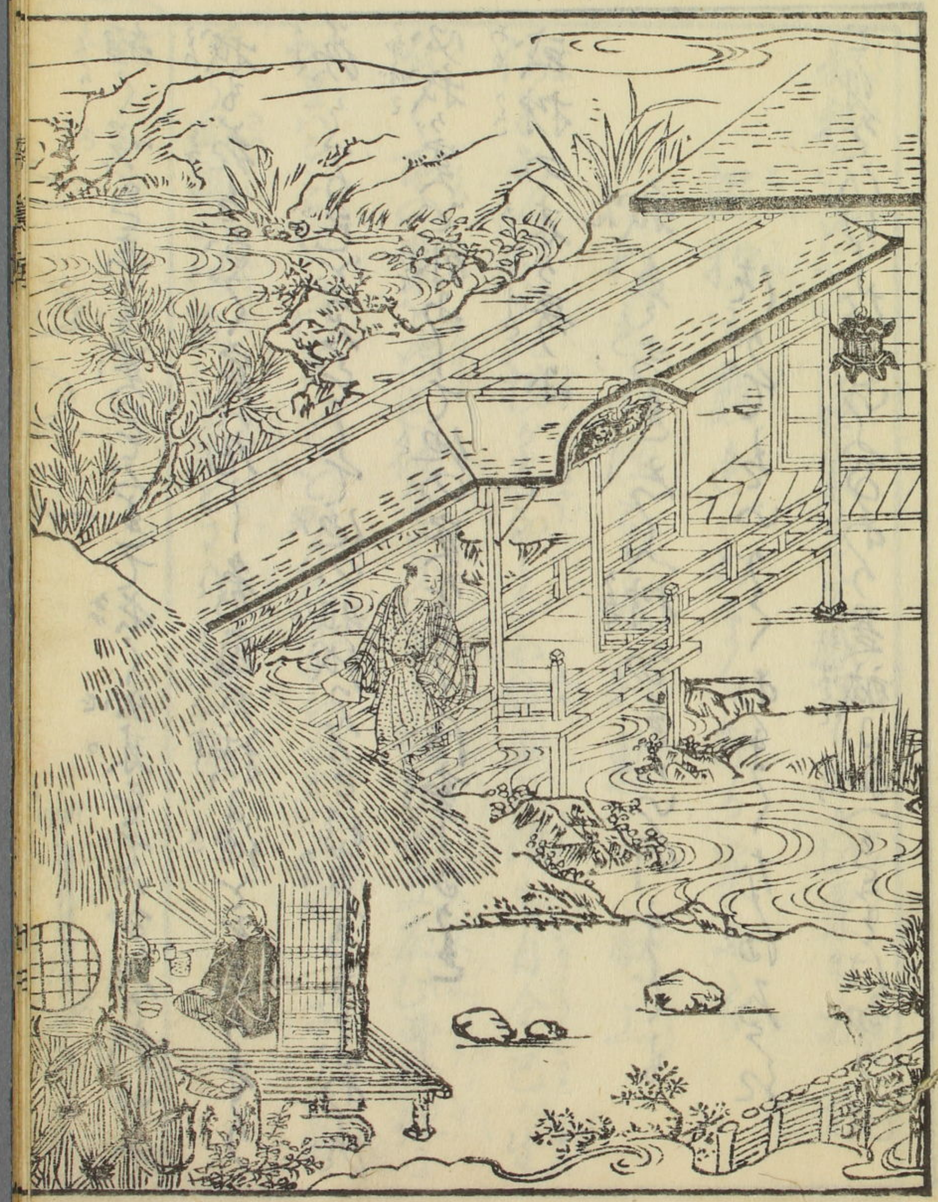


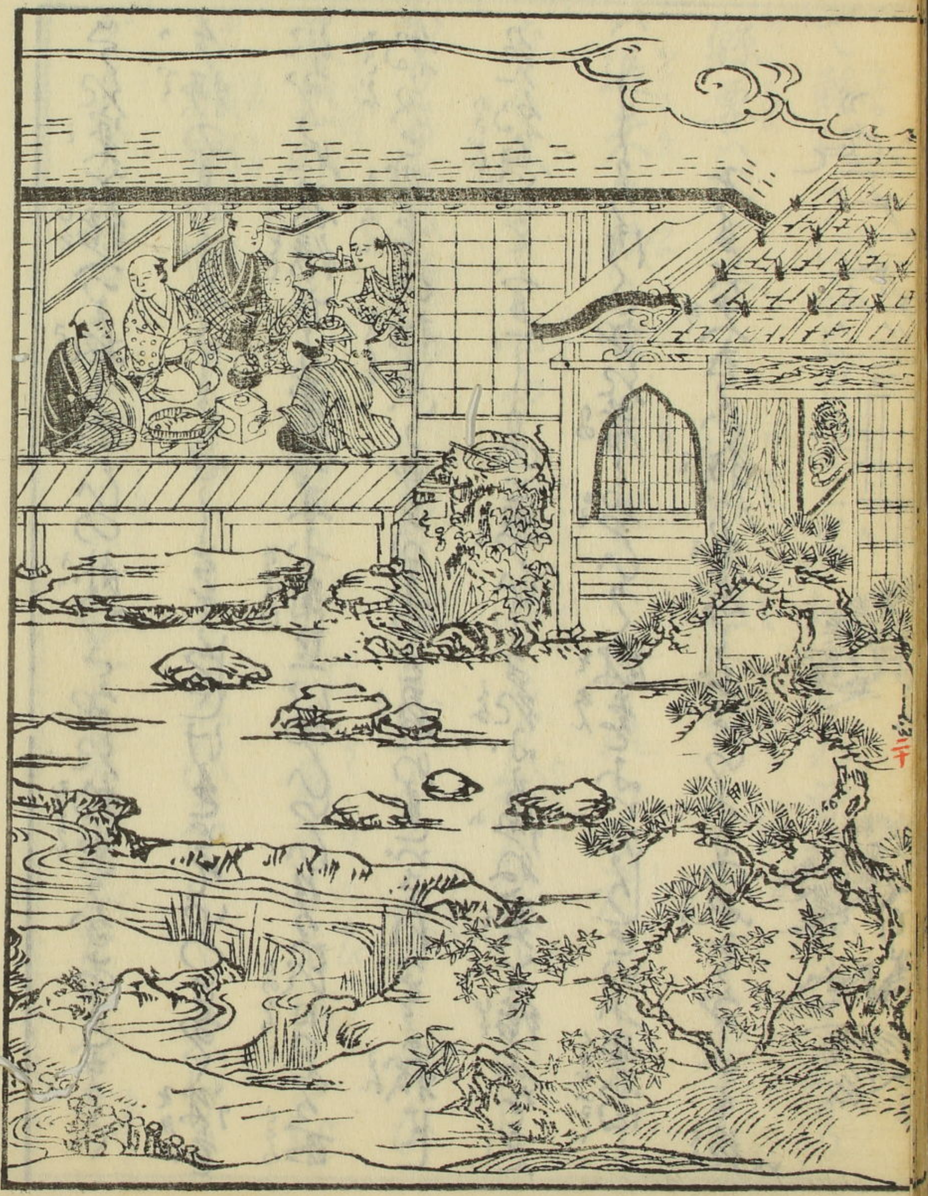
このうちなんト
くし浪華の宿が思ひ入まふほとあり弘五体と湧る
べ〳〵と温和の叔免ふ五体和合し六膚も安堵の思ひ
をなし脳い其時思ふやう下さる者自今の悲大つ
たうまびやう他へうる事を語るべしむうとうふ了簡を
思ひきるやう意気とびけ〳〵ものいふ下話をつふさの
抑りひろい草履より我い梨い替もるくあ〳〵とめうさね
功もおまど草履とういあまどもふ話ねるし義とも
念と腰立て疾疲を抑そうけまども下話い礼像

されいたいふ九まけ剣たうふ単履を打付らまま代
に恥辱と酸し今も其のうち世ふたるくさうも下話を
とそいたまろ扨又扇のえよある要と言りのそふやう
我い是のんぞん要ふて我ゆるげい忽扇の体いてさけつ
ぎし紙ろふ地紙絵骨折いかむるもの多けまども我
とびかむるりのるし〳〵いふてもお揃けまびおろく
めつおうちつを地紙一対し〳〵ろうさんと志けまび地
紙をこれをめくこ黄骨平骨うちようて談合志あ

て緑紙ようじみと名づけ要と名づけ緑要紙とかくしく旧紙を数ひ置くもの多要ども
い退去を繕ふ世よ捨られてうこれらの者ものうち
なりしむしく吐ふを離小咲あり勿忘のいとうに
ひりある紙信ある小角豆ありて紙ろくに繁しく思ひ
墓数ひしく悪みしけるがある時小角豆小前紙うむ
け我朝がいをくまし一りのと思ひちくしくまけける
がようくうえをいれ笑うるがくさえてぶなんある小

さうに実と結つと拙く思ひの外つこみれ勿忘草ありまうぐく
ケ様のものふちくせーこそ色けをとそうとみく深を
にひりぬ真信なる栗の木小角豆にぬひひろう訳日ろろ面
勿忘草の深をの様ないうるの小やと尋めまでされでそよ我は
先勿忘草ばまでしーりのと思ひしーぐれかも仙ぬ実と結ぶをろえ
しうちくこみ着と思ひしく深をみかりとつよ要因
そまい大きい我ぐ勿ちどとつふりの也そみさも花





短く咲きたりも実ならでなほ出来そでいもれる形ついよ
我も花をおほく実の丸しく亀甲た換へ他とそ志うまり
筈そうと己とりんごでして他の非紙なんこれ有べきことふあらば
必ず我が実を外みて他の実をそし給事なうま
或材の木が哥ふ
我をきもきぶ材るまいいまぐも
はぐでそいうぐおまくなおるれ
と身をひげたるとつつのあり是城小祝ごととばりひ

哥我がいぐ度をつき通実こと人感ぜしまくけ栗も亦一首
泥材も熟をバおまくなる実ふく
わをふほこうぬ知恵そ家上
仁のとあうぐこと材が志ろざしそや鉢きい雑も自今己う生
付く所の業を培と他をとぐむまし此の世史友け栗い他よ
かまいどころち礼実りとんんふをるとつつ
う西園の休息に菜をこうしまし油せうアハ

暇日何となくしたゝむまゝをはゞかりて親しき友よりを約つゝに案内
栗ふみを得て俳句其後い年月絶久
しふまつしふ今年末乃秋思をだも益人
これを得く掬まよちうえめんと
求めよまひいるむべくもあらじ
ふまゝせてゆくなり蕪
草狩や何ゐ乃ゐ憩れく
このあま
楚東

論語曰無適也無莫義之與比 里仁篇ニ出
君子ハ世間ノ事ニ斯モ之ニ
いそれ適莫ありとい
働くい是義ニ
○猶い能く似るにあらざるや

孟子曰君子行法以俟命而已矣 盡心下篇ニ出
君ハいかしも我を立ぬるまゝ法を行ふといふものなり
仰事も天のまゝにひまゝ也まるい命を俟ふ者ありや
○畸いよく似るにあらざるや

大意

○騎と云ハ本心ハ孤ニ成ル○西園の義ハ云ハ本心をとうとうなしくるしめ
ル事ハ○是が撃攘しくるとハ云ハ従者のさはぐを云ハくるし
む外ハ一ツにこまり果推して考ヘ見ルに○五倫の道ハ兄弟中あしきハ
てハ親ふ義ともまた夫婦のあしきハ皆病痛のあるハ此外ハ一ツ〳〵準へて知ルべし常に五倫の病痛ハ換ふると
ハ云ハ親師匠の教戒ハ針灸膏薬などハ其病ひを治するにて平常聖賢の書ハ養ふ五倫の道ハ治ル薬ハ病痛の平愈ハ
道ハ学ぶ事ハ云ハ本心ハ孤ニ成ル事ハ常に五体の害ハ病ひハ治ル事ハ右ハ筆言ハ云ハ幼稚の為に
平仮名ハ書ル事ハ已

跋

胸ハ是萬物の霊此隠居ハ世ハ五倫和合の中ハ云ハ雷ハ相続やしくハ家庸人の如ハ而已ハ先其徳と云ハ生死の境
ハ云ハ昭ようとハ方を照ハ再ハくしてハ雷ハ轟ハ云ハ紙きハ云ハ裏ハくしてハ雷ハ紙をハ云ハ意ハくして明ハ
ハくしハ雑言身ハくして而已ハ霊物也名此隠居ハ対面を

いかのも天命をいふ
べし予前うさるゝ所
をうらやうていひはいふ
いおうふ哀も見ふ照さ
おるをふこゞさゝれ働さ
身中のさゝらえ
苦労しさゝの紙
おびゐるもの
皆くのごとく我
に人を苦労
るゝんと恩へど天命
いる
を寒暑の道よ射面
人間世界の貧富貴賤

ふ不同のあるいふるゆ
く拙く愚い善悪
皆くのごとく我
に人を苦労
るゝんと恩へど天命
いる
を寒暑の道よ射面
人間世界の貧富貴賤

くるの天命なまゝに其身をまかせて日を送り外
をうらやむ求めなれば安楽なるべし猶義を守る
此隠もまた楽しむべき処なり空腹の時うまく食ひ
を先にくひてたゞくの中を経てのちに漸く飢渇
おのも行ふも各〻気を養ふ
びはおのおの歌うまじ和漢乱舞もまた
の事ども我等の一切とて油
くうた隠義天のあたへ
ひとつの私業でまげぬぞ

をもとめの私業をふ
ふ旅ても苦にせまいものうたを受
さてもうたふ行先もさぞあらん
月じうた世ふをるじやかまび
波の音なうじが為乃おくふう
苦を色うるみの雲と動
のく意の示しふようた合點して忘れてう
せびやそう隠と月じ事でありまとを綴よし筆紙

そいやしく海そうかる小児のきそうてまぶも
ひとえに教ふる異興の言あり滑稽わろ狂言綺語の
うちふ道理とのべたもあり熟してめのの
其滋味濃厚なるの言近くして遠きの善言
みりとの仰もあまたびの徒ふんるとろん事ばいくそて聊
其志を後ふ云尓

補菴

神田旅籠町壹丁目拾番地
三河屋幸三郎

○書舗循古堂藏版目録

京麩屋町通三条上ル二丁目
近江屋治郎吉

速水房常校訂

四書集註	京極版	十冊	職原鈔 二冊
鼇頭四書集註		十冊	和歌職原鈔 八冊
四書類函	河子鷹輯	四冊	和歌職原捷徑 大江資衡補 二冊
五經類函	河子鷹輯 未刻	八冊	徒然古今抄 十二冊
詩經示蒙句解	中村惕齋著	十八冊	神祇服忌令 一冊
同古註國字解	未刻		改正服忌令 一冊
新註書經國字解	大江資衡著 未刻 十冊		弓法義人草 小笠原弓書 二冊
左傳白文		六冊	射術枕書 二冊
			朝鮮馬經 四冊

列子　四冊
兵家古戰傳　五冊
同張湛注　四冊
平家物語　真字　十二冊
同國字解　八冊
源平盛衰記　真字　廿五冊
性理字義　二冊
日本咏物詩　伊藤先生輯　三冊
同頭書　二冊
明咏物詩選　伊藤先生輯　近刻　三冊
韻字孝經解　一冊
江吏部集　大江匡衡詩　大江資衡輯　近刻　四冊
天地萬物造化論　魯齋王柏撰　一冊
玄圃先生集　二編詩部　三冊
文公家禮　八冊
仲景全書　十二冊
大和家禮　八冊
千金方　廿二冊
和字彙　九冊
唯識論述記　廿冊

續小字彙　一冊
唯識論同學鈔　六十冊
續蒙求　八冊
唯識略釋　四冊
袖珍韻鏡　一冊
四部錄鈔　一冊
書史會要　赤剡　九冊
夢中問答　夢窓國師法語　三冊
宋七君子墨蹟　石摺　一冊
臕隱居　手嶋先生　一冊
朱子風雪帖　石摺　一冊
彔洋忘　手嶋先生　三冊
朱文公像贊　石摺　一冊
子弟訓　手嶋先生　一冊
朱子孝弟八字　石摺　一枚
塵尾　手嶋先生　三冊
朱子勸學文　石摺　一枚
前訓　手嶋先生　中嶋氏藏版　一冊
子昂赤壁賦　石摺大字　二冊
知心辨疑　手嶋先生　一冊

皇都書肆

發兌所 二条上ル二町目
近江屋治郎吉

米南宮水墨帖	石摺大字	一冊
雪山先生墨蹟	石摺	十二枚
筠圃先生手公帖	石摺 宮子常書	一冊
字學津梁 正字千文	石摺 方壺先生書	二冊
文覺上人國字文	石摺 方壺先生書	一冊
名筆手本		一冊
阿弥陀裸物語	一休和尚問答ノ書之	二冊
童子教 附實語教		一冊
訓児孝經繪抄		一冊
諸国要州	廣求上人著	五冊
町人身体通	手嶋先生	一冊
孝經童子訓	孝經ノ解キ和ラ頭ニ前訓ヲノス	一冊
画本親孝行	近世孝子傳ヲアツメ解ス	二冊
教訓春日和	金蘭子述	一冊
和州和田邑孝女茂代傳		一冊
頭書合類節用集		一冊
新實語教	手嶋先生著 児訓ノ書之	一冊
糠俵續篇		二冊
手嶋先生專用書目	施印	
諸国草鉄炮		七冊